

## これまでの先土器時代調査の結果

これまでに和良比遺跡では、先土器時代の遺物が5ヵ所から検出され、うち4ヵ所は本格的な調査が行われています。出土した場所により時期のちがいがみられるため、ここでは時期別に石器群を紹介していきます。

約1万年前の石器群は、昨年度の本調査区の北端から検出されました。ここでは3つの出土集中地点がみられました。(9ページの分布図参照)。黒曜石製の剥片・碎片がほとんどで、その中に2点のナイフ形石器などが含まれていました。また、熱をうけた礫も、まばらではありますが発見されたことから、当時、ここで火を使っていた可能性が認められました。

約2万年前の2つの石器群は、どちらも出土の規模が小さく、それぞれが1つの集中地点を



構成するような出方をみせ  
ました。ほとんどが安山岩  
製の剥片・碎片でしたが、  
南よりの石器群から使用に  
よってかなり刃のつぶれた  
剥片が出土しています。

約25,000年前の石器  
は、台地の西側の小さな谷  
をへだてた先端部から検出  
されました。ここはまだほ  
とんど整理に手がつけられ  
ていないため、あまりはっ  
きりしたことは言えませ

が、今のところ道具として加工された石器は見あたらず、ほとんどすべてが剥片と碎片で、他に石核がまざっていることから、ここで剥片をはがしとる作業をし、できあがった剥片をどこかへ運びさって、そこで石器に加工されたのではないのでしょうか。

和良比遺跡ではこれからも調査が続けられ、より多くの場所から先土器時代人たちの生活のあとが発見されるものと思われます。この台地を彼らがいかにかけめぐったかは、今後の調査によって次第に明らかにされてゆくでしょう。  
(小出結花)



## 石器のつくり方

(当時の石器づくりは決して偶然やでたらめではなく、規則的に効率よく行われていました)

用意するもの



① 原石を、ハンマー・ストーンを使って先削りし【石核】を作る。

モロ  
【石核】  
同じ様な剥片を、連続的  
にはがしとることもなる  
石。目的とする剥片の形  
などによって、いろいろ  
な形の石核がある。



② 石核の平坦面にパンチ  
をあて、ソフト・ハンマ  
ーで剥片(石刃)を連続  
的にはがしとる。

石刃  
石刃はそのまま使  
われることもあるが、  
さらに細い加工がな  
され、他の石器に作  
られることもある。



③ ソフト・ハンマーで形  
をととのえ、うすく調整  
していく。

石の縁に骨などをあて、  
下に力を加えることによ  
ってうすくはがすことが  
できる。



④ さしあがり

骨につけ  
て使え  
る石

## 2. 縄文時代の和良比



今から約1万年前、日本列島をとりまく環境は温暖化によって大きな変化をとげました。それにあわせて、人々の生活も大きく変えられていったのです。こうして生まれた「縄文時代」にも、ここ和良比では人々が家を構え、狩猟と採集の日々をすごしていたことがわかってきました。

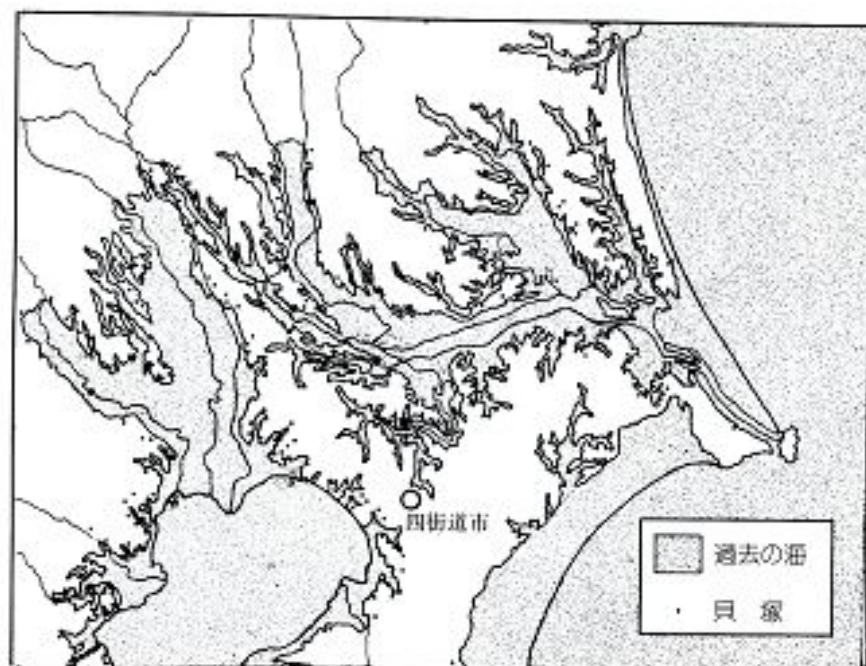
氷河時代最後の氷期が約1万年前におわり、どんどん気候が暖かくなっていきました。約6,000年前には、現在の年平均気温よりも2～3度も高くなったのではないかといわれています。このため、それまで発達していた氷河がとけだして、世界中で、海水面が上昇しました。

関東地方でも、かなり奥まで海がはいりこんでいたことが知られています。(下図参照)。またそれまで広がっていた五葉マツなどの針葉樹林しんようじゅりんから、コナラ、クリなどの広葉樹林こうようじゅりんにかわり、そこに住むのに適したイノシシやニホンジカがナウマン象などにかわって広く住みつくようになったのです。こうした変化の中で、人々はさまざまな発明や工夫をして、新しい環境にあった新しい生活をつくりあげていきました。

縄文人の数々の発明の中で、まずあげねばならないのは土器の製作でしょう。生では食べられなかったドングリなどの木の実も、土器を持つことによって煮炊きできるようになり食べ物にすることができたのです。はじめ人々は粘土を火で焼くとかたくなるという事実を発見し、これを利用して、煮炊きや貯蔵用の器うつわを作るようになりました。こうして作られるようになった土器にはやがてさまざまな形のものが生まれ、その表面にもさまざまな文様がつけられました。

中でも特徴的なのは、よった縄をころがしてつけたことで、それから名前をとり、この時代に作られた土器を「縄文土器」とよんでいます。

縄文土器は、約8,000年もの間、全国で作られましたが、それらはすべて同じものではなく、地域によりそして年代によって形や文様に流行がありました。右の表は南関東地方における流行の型をまとめ



5,000～6,000年前の関東平野 (東木龍七 1926)

て、古い順からならべたものです。「〇〇式」というのは、その流行を代表する土器が発見され、広く研究者に認められた遺跡の名前がつけられています。各地でこうした流行の順序がわかかってきたために、たとえ1つの土器片にしても、文様がはっきりしていればだいたいの年代を知ることができるのです。和良比遺跡でも、これまで数多くの土器片が出土していますが、それらはさまざまな時期の流行の型に属していることがわかりました。(和良比で出土している土器は次ページ以降の写真によって紹介してあります。)

縄文人の発明には、他にも弓矢をあげることができます。先土器時代にはナウマン象などの大型動物を狩るのに石槍が使われましたが、森林に住むおくびょうなシカやイノシシを狩るには、遠くからでもねらえる弓矢が適しています。また、犬を飼っていたらしいので、そうした狩りにも使われていたのでしょう。さらに人々は、食料をもとめて海にまで出ていくようになりました。和良比でも、ある一軒の住居址からハマグリなどの海でとれる貝の殻がまとまって発見され、海とかかわりをもった生活をしていたことがわかりました。もちろん貝だけではなく、魚もとっていたものと思われまます。こうしたいろいろな発明によって、縄文人たちは新しい環境にあった生活をつくりあげていったのです。

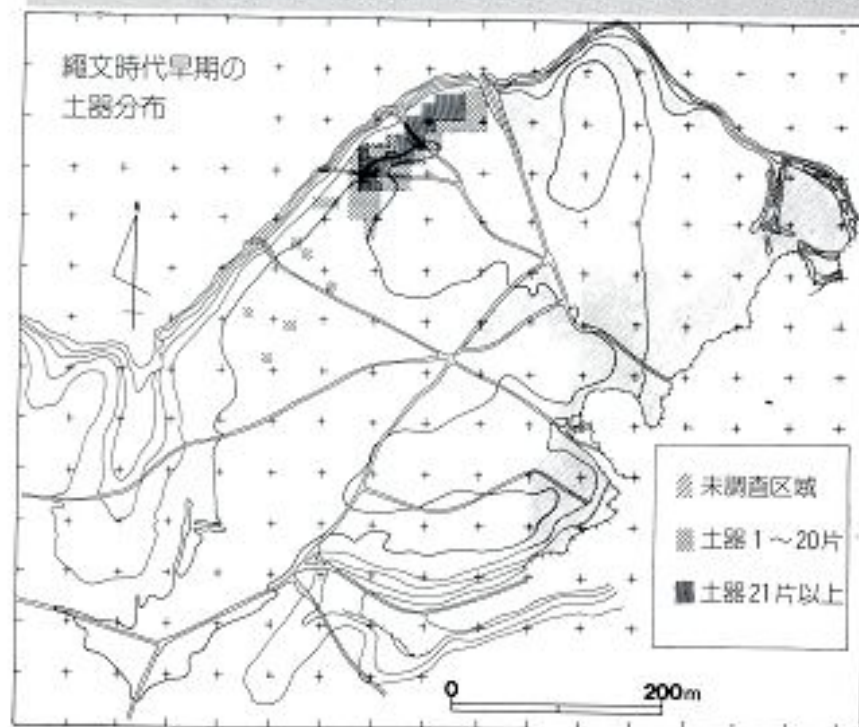
みまかざり  
耳飾などのアクセサリまで出土することから、彼らのくらしは案外豊かであったのではと感じさせられてしまいます。

大 別	細 別	
草 創 期	隆起線文土器 細隆起線文土器 裾隆起線文土器	隆起線文系土器群  爪形文系土器群 押任縄文系土器群 回転縄文系土器群
10000		
早 期	井草式 大丸式 夏巻式 稻荷台式 花輪台式 三芦式 田戸下層式 田戸上層式 子田口式 野島式 鶴ヶ島台式 茅山下層式 茅山上層式	器糸文系土器群  沈線文系土器群  条線文系土器群
7500		
前 期	花積下層式 関山Ⅰ式 関山Ⅱ式 黒浜式(古) 黒浜式(新) 磨磯a式  磨磯b式  磨磯c式 十三巻線式	羽状縄文系土器群    浮島Ⅰ式 浮島Ⅱ式 浮島Ⅲ式  鞆津式
6000		
中 期	五領ヶ台式 磨坂Ⅰ式  磨坂Ⅱ式 中餅式 加曾利EⅠ式 加曾利EⅡ式 加曾利EⅢ式 加曾利EⅣ式(古) 加曾利EⅣ式(新)	下小野式 阿玉台Ⅰ式 阿玉台Ⅱ式 阿玉台Ⅲ式     称名寺Ⅰ式
4000		
後 期	称名寺Ⅱ式 堀之内Ⅰ式(古) 堀之内Ⅰ式(新) 堀之内Ⅱ式 加曾利BⅠ式 加曾利BⅡ式 加曾利BⅢ式 曾谷式 安行Ⅰ式 安行Ⅱ式	
3000		
晩 期	安行Ⅲa式 安行Ⅲb式 安行Ⅲc式 安行Ⅲd式 千網式 荒浜式	和良比で出土している土器型式
2000		

〈関東地方の縄文土器編年表〉

(川端弘士・近藤貴子)

## 縄文時代早期の土器 (7,500~10,000年前)



和良比遺跡で発見されている最も古い土器は、今から約9,000年前の縄文時代早期のものから出土しています。この時期は、縄文時代草創期がまだ氷河時代の影響で寒かったのに比べ、気候もようやく暖かになり、海や山の幸がしだいにふえはじめ、生活条件が安定してきたころと考えられています。

この時期の土器は、底が尖った砲弾のような形や、丸い形をしています。これらは、ほとんど物を煮るときに使われていました。現在わたしたちが使っているナベやカマから想像すると不思議な形のように思えるかもしれませんが、底の部分を地面に突きさしたり、石で囲んだりして立たせて、火を焚き、木の実や魚貝などを煮て食べていたのです。



井草式土器



夏島式土器

井草式土器—東京都杉並区井草遺跡から、夏島式土器—神奈川県横須賀市夏島貝塚からそれぞれ出土した土器がもとになって名前がつけられています。縄文時代早期ではいちばん古い土器で、井草・夏島の順に編年されています。文様はよった繩をころがした縄文や、よった繩を棒などに巻きつけてころがした撚糸文がほどこされています。(17ページの1図を参照して下さい) 大きさは割合小形で、高さ20cmほどでしょうか。



鶴ヶ島台式土器



茅山下層式土器



茅山上層式土器

うがしまだいしきどき かやまかそうしきどき  
 鶴ヶ島台式土器・茅山下層式土器・  
 かやまじょうそうしきどき かながわけんこすかしか  
 茅山上層式土器—神奈川県横須賀市茅  
 やまかいづか  
 山貝塚から出土した土器がもとになり  
 名前がつけられています。

これらは、縄文時代早期の終りごろ  
 に編年されています。これら3つは、  
 同じ貝塚から出土していますが、古い  
 順に鶴ヶ島台・茅山下層・茅山上層式  
 と名づけられています。

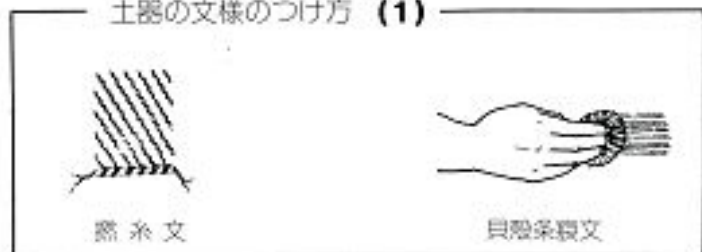
しんよう  
 文様は、アバラ骨のような表面をし  
 たハイガイなどの二枚貝を使ってつけ  
 たいがんじょうこんしん  
 た貝殻条痕文（下図参照）を、表や裏  
 につけています。また、粘土の中に植  
 物の繊維を混ぜて焼いているのも特徴  
 です。

底は、尖った形からだんだんと平ら  
 な底にかわっていきます。

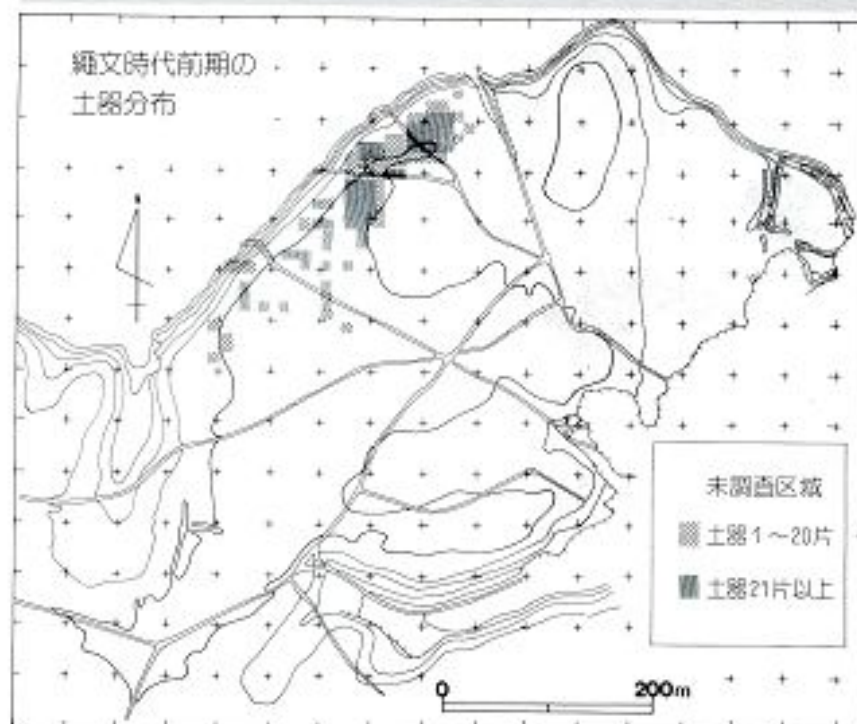
和良比遺跡では、この土器を使って  
 いた時代の堅穴住居址や、火を焚いた  
 穴が発見されています。

（川端弘士）

土器の文様のつけ方 (1)



## 縄文時代前期の土器 (6,000~7,500年前)



和良比遺跡の縄文時代前期の土器は、早期とほぼ同じ区域から数多く発見されています。これはなぜかと言うと、14ページでも説明しているように、海水がこのあたりまで入り込んできたことにより、山の食物を求めて移り住む生活から魚貝類が豊かになったことで、村をつくり、ながくその地で生活するようになった

たからと思われています。このような傾向は縄文時代早期末ごろからみられ、前期に定着するようになりました。土器は、尖った底が平底になりました。このことは、竪穴式住居に住むようになって床に置くようになったからと考えられています。種類も多く、浅い鉢、皿などいろいろな土器が作られるようになりました。



黒浜式土器



くろはましき 黒浜式土器—さいたまけんみなみさいたまぐんはすだ まちくろはまかいづか 埼玉県南埼玉郡蓮田町黒浜貝塚から出土した土器をもとに名がつけられています。文様は、太くて粗雑な縄文をいろいろ組み合わせてつけられています。また、かやましき 茅山式土器と同じように、粘土に植物の繊維を混ぜて焼きあげています。



諸磯b式土器

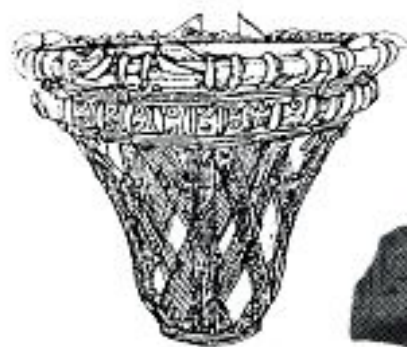


もろいそ 諸磯b式土器—かながわけんみづうらし もろいそかいづか 神奈川県三浦市諸磯貝塚から出土した土器をもとに名がつけられました。形は、大形で背たけの高い土器が多く出土しています。文様は、竹を半分に割った工具でつけたり、(19ページ2図の2・3を参照して下さい) 細かい粘土のひも紐をはりつけた上に、きざみ状の文様をつけています。





浮島Ⅲ式土器



諸磯c式土器



興津式土器



うきしまんしきどき いばらぎけんいなしきむんさくくわむらうき  
浮島Ⅲ式土器—茨城県稲敷郡桜川村浮

島貝ヶ窪貝塚から出土した土器をもとに  
名前がついています。文様は、図1のよ  
うな竹を半分に割ったものを交互に支点  
をかえて三角形をつけたものや、貝殻を  
使った文様がさかんに使われています。

しらすしいしきどき  
諸磯c式土器—神奈川県三浦市諸磯貝  
塚から出土した土器がもとになっていま  
す。竹を割った工具で連続爪形文や並行  
沈線文を、土器の全面につけたり口縁の  
付近を色々とかざったりしています。こ  
の土器の流行は諸磯b式土器の系統を引  
いていますが、縄文はまったく使われな  
くなっていきます。

おきつしきどき いばらぎけんいなしきむんさくくわむらうき  
興津式土器—茨城県稲敷郡美浦村興  
津貝塚から出土した土器がもとになっ  
ています。図の4番のようにしてつけ  
た貝殻腹縁文を多く使って文様がえが  
かれています。

じゅうさんかみだいいしきどき かながわけんかわさきしじょう  
十三菩提式土器—神奈川県川崎市十  
三菩提遺跡出土の土器がもとになっ

ています。この土器は縄文を  
多く使っています。その他、  
土器の表面に粘土をはった  
りして大きな三角形の文様  
をつくっています。(川端弘士)

土器の文様のつけ方 (2)



1 三角文



2 連続爪形文

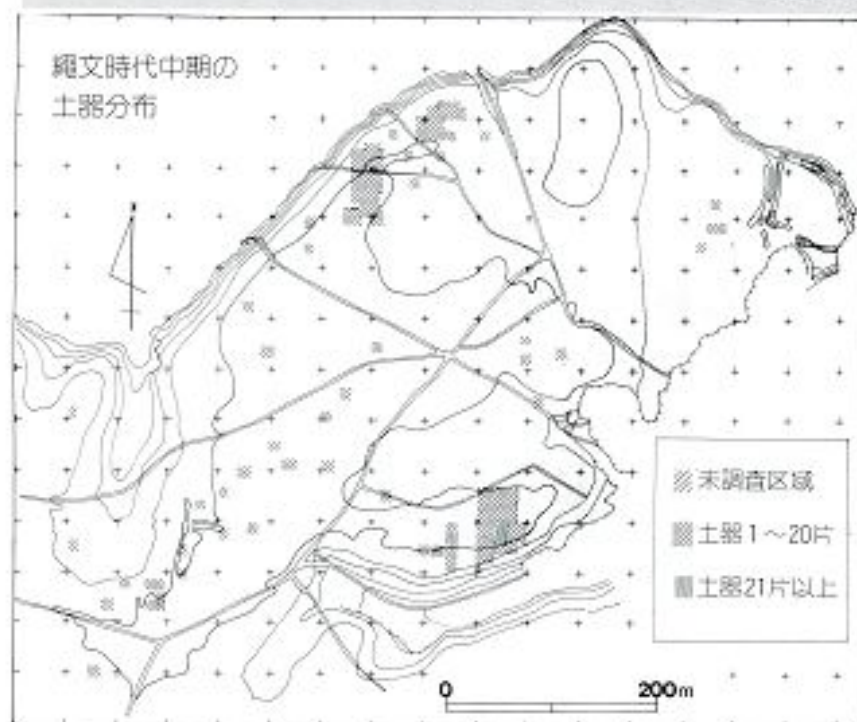


3 平行沈線文



4 貝殻腹縁文

## 縄文時代中期の土器 (4,000～6,000年前)



和良比遺跡の縄文時代中期の土器分布は、台地全体に広がっているようです。しかし、この分布には特徴があります。台地北側縁辺部は、五領ヶ台・阿玉台・中峠式土器など中期初めの土器が分布して、南から東側の縁辺部では、中期後半の加曾利E式土器が遺構といっしょに分布しているのです。場所の移動はいろいろ

原因があったのかもしれませんが。ある学説によれば、暖かかった気候が中期後半ころからしだいに寒くなりはじめ、現在とあまり変らない気候になってきたそうです。もし、この学説を借りるならば、日の当る南側は、当時としても暮しやすい場所だったのかもしれませんが。



五領ヶ台式土器



五領ヶ台式土器—神奈川県平塚市広

川五領ヶ台遺跡出土の土器がもとになっています。ほとんどの土器は底がひろく、筒形をしています。文様は竹を半分に割った工具でつけられていますが、他は表面を磨きあげています。

阿玉台式土器—千葉県香取郡小見川

町阿玉台貝塚出土の土器がもとになっています。粘土の中にキラキラ光る雲母をたくさん混ぜています。縄文はほとんどつけていませんが、かわりに粘土の紐をはったり竹の工具で文様がつけられています。



阿玉台式土器

